

ラファエル・ブリュトー編 ポルトガル語・ラテン語辞典に見いだされる 18 世紀前半のヨーロッパにおける日本

水戸 博之

カトリック司祭ラファエル・ブリュトー (Raphael Bluteau, 1638-1734) によって編纂された「ポルトガル語・ラテン語辞典」(Vocabulário Portuguez e Latino, 1712-1728、コインブラおよびリスボンにおいて刊行) は単なる語学辞書というよりは、むしろ一つの大百科事典というべき 5,000 ページを越える労作である。編纂者がインド宣教を積極的に行ったテアティノ修道会に所属していたことから、アジア地域の記述が豊富であり、日本についての記述も、情報源はキリシタン時代から江戸時代の従来「鎖国」と呼ばれて来た交易が厳しく統制されて時期にまでおよぶ。多くは断片的な記述でありしばしば様々な誤解などもともなうものの、18 世紀前半のヨーロッパ人が日本をいかにとらえていたかを垣間見ることができる。

ポルトガル語とスペイン語について

今回の講座では、言語に関してはポルトガル語が中心になるが、本題に入る前に、スペイン語とポルトガル語の関係について、簡単に触れておきたい。いずれもイベリア半島起源の言語であり、16 世紀、日本が最初に接触したヨーロッパ系言語である。現在の話者人口は、スペイン語が約 4 億人、ポルトガル語が約 2 億人といわれ、世界の大言語である。

しばしばスペイン語とポルトガル語との関係、特に近親性や類似性について尋ねられる。お互い自分の言語でそれぞれ話しても意思の疎通は可能ではないか？日本語の方言程度の差異ではないか？いずれの指摘も大枠では正しいと言える。実際、ブリュトー自身、第 8 巻の補遺で「(ポルトガル語の) 姉妹であ

るカスティリヤ語 *su hermana la lengua Castellana*」といった表現をしている。では何が異なるのか？ここでは狭義の言語学的観点からの比較対照は複雑極まりないものとなるため、政治的・社会的観点から二つの言語の関係を見てみようと思う。

歴史的に明確な分岐点は、公用語としての各言語の文法書や辞書がいつ始めて編纂されたかに求めることができる。一見無関係のように思われるが、文法書の編纂は国際関係における政策的な意味合いを持つことがある。最初期のものに、スペイン語ではアントニオ・デ・ネブリハ (Antonio de Nebrija) 『カスティリヤ語 (スペイン語) 文法 *Gramática de la lengua castellana*』1492年、『カスティリヤ語正書法 *Reglas de ortografía de la lengua castellana*』1517年、ポルトガル語ではフェルナオウ・デ・オリヴェイラ (Fernão de Oliveira) 『ポルトガル語文法 *Gramática da linguagem portuguesa*』1536年がある。ネブリハの文法書が出版された1492年という年に注目されたい。この年は、スペイン史において、いくつか大きな出来事があった。グラナダの陥落によるイスラムの勢力圏がイベリア半島からの消滅とイスパニア統一の完成。ユダヤ人の追放。コロンブスの新大陸到達。そしてネブリハの文法書出版である。これはスペイン語のみならず、近代語では初めての文法書である。それまで文法書といえば、古典語 (ギリシャ語・ラテン語) に関するものであった。ネブリハがイサベル女王にこの文法書を献呈する際に、女王が有用性について尋ねたことに対し、「陛下、言語は帝国の道具であります」と彼自身あるいは傍に仕えていた僧侶が答えたという有名な逸話がある。

言語は、支配の道具であるばかりでなく、いずれの言語を使用するかという選択自体が、スペイン語とポルトガル語の様に近い言語の場合であっても、否、近いが故に、非常に微妙でありかつ難しい問題ともなり得るのである。ブリュトーの辞書にも、補遺の部分にスペイン語辞書やスペイン語学の記述がポルトガル国内の地方語に関する章とともに見られ、隣接する大国スペインの脅威に対するポルトガルの立場を反映した内容ともとらえられる。また、ブリュトーの辞書が刊行された18世紀前半は、辞書自体にも記述が見られるように、ポルトガルがスペインのみならず、特にアジア地域においてはすでに新興勢力のオランダやイギリスに覇権を奪われていた。このような状況下の国家の公用語であるポルトガル語で記述された当時の日本事情を例に、国際関係における言語の持つ社会的・政治的機能の一端もまた考察したい。

ブリュトーの辞書

辞書が編纂された年代に今一度注目したい。18世紀半ばにフランスにおける啓蒙思想の勃興とともに行われた百科全書の編集（1751 - 1772）よりも四半世紀先行する。この先進性は、青年期に当時人文学の最高学府であるイエズス会のラ・フレーシュ学院（かつて哲学者デカルトも学んだ）やクレルモン学院で学んだ経歴に多くを負っていると思われる。現代の眼から見ると、奇妙な中世と近代の混淆ともいふべき時代錯誤が見られる。すなわち、大航海時代以降の当時において最新の情報を持ち、基本的にはほぼ現在と同様な新大陸や南北両極を含む世界地理観をもちながら、中世的なプトレマイオスの天動説の宇宙観であり、また、18世紀前半ではやむをえなかったかもしれないが、鯨は巨大な魚類であるといった記述も見出される。

他方、この辞書は、ポルトガル王ジョアン五世（João V, 1706-1750）に奉げられ10数年の歳月を費やして出版されたものであるが、各巻出版するたびに、極めて煩瑣な検閲手続きが必要であったことを各巻頭部が示している。ポルトガルとスペインにおいては、いわゆるルターらの宗教改革(1517)以来、対抗勢力であるカトリックの牙城として、厳しい言論・思想統制が行われ、書籍の輸入なども厳格に管理されていた。すなわち、この辞書は、啓蒙思想とは極めて異質または反対の環境の中で刊行されたと考えられる。一言加えると、これまた後世の目に奇異に映ることであるが、表現の自由に大きな制約があったと思われる時代に、偉大な文学や芸術が開花したという歴史的事実を忘れてはならない。

日本を直接的に扱った項目の数は、辞書全体の中で見れば僅かではあるが、断片的とはいえ情報の総量はかなりのものになるところから、特に地理と交易、さらにブリュトーが依拠した情報源に焦点をあて、いくつか興味深い事柄を取り上げる。

A) 日本に関する地理情報

* ブリュトーの世界地理観に見るアジアと日本の位置づけ（「大陸Continente」の項）

旧大陸がヨーロッパ・アジア・アフリカの3部分から構成されているという説明から始まる。ここで印象的なことは、アジアが旧大陸の中で最も温暖で豊かな地域とされていることである。アジアはさらに6地域に分けられる。すなわち、トルコ・アラビア・ペルシア・インド(大陸)・モンゴル帝国・ガンジス以遠のインド、そしてタルタリア (Tartaria)である。最後のタルタリアが広大で漠然とした領域であるが、その東部が中国と満州に該当する。私たちにあって、驚くべき記述は、日本がペルシャ・モンゴル・中国ともにアジアで主要かつ最も知られた帝国の4つの内に入るというものである。少なくともブリュトーが、日本が中国の属国ではなく独立した国家であるという認識を持っていた点は、注目に値する。

* モンスーン気候圏の中の日本(「モンスーン Monção」の項)

季節風を意味することは現在と同様であるが、モンスーンによって一定の地域に航行するという記述ともに、航路の地理的視野が興味深い。西はホルムズ海峡からインドのゴアから日本に及ぶ広い地域が対象となり方角と時期がしるされている。例えば、日本からインドへは10月、日本から中国へは3月、コーチン(コーチシナ?)から日本へは4月末などである。日本からインドという航路が意外な感があるが、日本がアジアの交易圏の中で明確に位置づけられていた一例と考えられる。

* 日本は北緯31度 - 40度・東経171度 - 188度に位置する(「ヤパウン・日本 Iapam」の項)

奇妙な記述である。緯度に関しては、南は種子島、北は盛岡に相当し正確であるが、経度の東経171度 - 188度とは誤謬でないとすれば何を意味するのだろうか。ここに当時のポルトガルの置かれた国際的地位が反映している。当時の経度ゼロは、現在の西経45度に相当する。これは、スペインとポルトガルが1494年に結んだトルデシリャス条約(el tratado de Tordesillas)の境界線である。すなわち、これより東側がポルトガルの独占航海域あるいは勢力圏であり、西側がスペインに属すると決めたのである。その反対側、すなわち当時の180度は、現在の東経135度に相当し、171度と188度は現在の東経126度

から 143 度に相当し、沖縄から北海道中部までが入る。では、何故理論的には本来存在しない 188 度を主張したのであろうか。現在の東経 135 度は日本標準時子午線にあたり、兵庫県明石市や京都府京丹後市を通過する。16 世紀から 18 世紀においても日本の枢要部は、これより東、京や堺さらに江戸は、境界線の外になる。競争相手であったスペインに対して、ポルトガルが日本を勢力下であることを合理化するには、このように一見不合理な数値を主張する必要があったためと思われる。もっとも、ポルトガルと日本の交易は、1639 年（寛永 18）に幕府がポルトガル船の来航を禁止した後、ポルトガル側の何度かの要請にも関わらず途絶し、またポルトガル自体、すでに 17 世紀の中ごろまでにはオランダの進出に対しアジア地域の勢力圏のかなりの部分を失っており、この日本を版図に含める地理観は実体の伴わないものであった。

* 日本を構成する 3 つの主要な島：Niphon, Xicocô, Ximo（「ヤパウン・日本 Iapam」の項続き）

3 つの島は、それぞれ本州、四国、九州に相当すると考えられる。ここで奇妙なことは、Niphon が日本ではなく本州と考えられていることである。ブリュトーの辞書には、日本の国名が複数見られる。すなわち、Iapam, Japaõ (sic); Niphon, Nipon であり、「ジャパン」と「日本」の 2 系統とそれぞれ綴りの変化形である。日本に関する項目は複数見られるが、日本国内の情報にはかなりの混乱や誤解が見られる。

* Niphon は、日本最大の島（「Niphon」の項）

ブリュトーは Iapam とは独立して Niphon の項目を設けている。かつての首都が「Meaco 都」で現在は「Jedo」と実質的な遷都を認識していながら、例えば、「Niphon（本州）に 53 の王国(reynos)が存在する」という記述が見られる。53 の王国とは東海道五十三次のことであろう。Niphon（日本）の原語における意味を「光の源泉 Fonte da Luz」と説明していながら、この混乱はどうしたことであろう。

* 情報源が年代的に複数(「ヤパウン・日本 Iapam」の項、その他)

ブリュトー自身がカトリックの修道僧であったことから、日本の情報源の主たるものは 1600 年に刊行されたジョアン・デ・ルセナ (João de Lucena) 神父の「フランシスコ・ザビエル伝 Historia do P. Francisco de Xavier」である。キリシタン追放後の情報については、対立国イギリスやオランダ側の人物であるはずのウィリアム・アダムス (三浦按針) の証言が記述されていることが注意を引く。年代的に半世紀以上の差があり、その間、織豊政権から徳川幕府へと政治社会も変化している。

年代の下限：交易品に関し、伊万里焼や銀の産出国 (石見銀山) の記述が見られることから 17 世紀の半ばくらいまでの情報を把握していたと思われる。

辞典の記述から (抄訳)

* イタリックは原文に対応；太字は水戸

大陸 (Continente)

大陸 (地理学用語。陸。島ではない大地) 地理学者たちは地球の領域を多くの大陸に分け、それらに様々な名称を与えている。たとえば、*旧大陸*、これはまた我々の (大陸) と呼んでいる、なぜなら我々はその一部、すなわちヨーロッパ、(あるいは) アジア、アフリカに居住しているからである。そしてまさにこの大陸は上位の、*東方の* (大陸) と呼ばれている。なぜなら一般の見解によれば、東半球の上部を占めているからであり、同様にそれを示す地図においては、本初子午線の東方に位置しているからである。そして、プトレマイオスが正確にこの大陸を記述したことから、プトレマイオスの名前がまたそれに与えられたのである。第二の大陸はより小さく、それは新しい、*下位の* 大陸と呼ばれている。新しいとは、ほんの何年か前にこの部分が発見されたからであり、下位のとは、一般の目からはそれが我々の下にあると考えられているからである。この新または下位の大陸は、私たちがアメリカあるいは西インド、あるいはカスティーリャのインドと呼んでいるものである。これらの二つの旧新大陸のほかに、二つの極地がさらに二つの大陸であると推定されている。ひとつは南方のものであり、未知の南方の地であり *南方大陸* と呼ばれており、もうひとつ北方のものは、北極の下に位置し、*北方大陸* と呼んでいる。これら二つの大

陸について、我々は現在までのところあまり情報を持っていない。十分に考えられることは、これらが面積、豊かさ、住民の数において、前二者（新旧）大陸に対し、はるかに及ばないであろうことである。（以下略）

アジア (Asia)

我々の大陸の三つの部分（ヨーロッパ・アジア・アフリカ）の中で、最も東方に位置し、最も温暖かつ豊かな地域である。地中海と、エリトリア海、インド洋、スキタイ海（黒海？） 北欧の間に位置する。ヘレスポントからマラッカまで 1,733 レグアあり、アラビア湾からタビン岬まで 1,729（レグア）の距離がある。 *1レグア = 5,572m ?

アジアは6つの大きな地域に分けられる。すなわち、アジア側のトルコ（小アジア？） アラビア、ペルシア、陸のインド（インド亜大陸）あるいはムガール帝国、さらにガンジス（河）以遠のインド半島、そしてタルタリアである。

アジアの国家で著名で主要な国家は 40 ある。すなわち、4つの完全な (inteiros) 帝国：ペルシア、ムガール、中国、そして日本である。他の二つの帝国、すなわちトルコとモスコヴィアの地方は、主要な部分がヨーロッパ側にある。（中略）

またアジアにはヨーロッパ人が確立した三つの勢力圏が存在する。第一の勢力圏はポルトガル人のゴアとインドの反対側の海岸のものであり、第二のそれはスペイン人のフィリピン諸島のものであり、三つ目は連合州あるいはオランダ人のベタヴィア（sic）、ジャワ島、多数のインド海岸地域である。（以下略）

モンsoon (Moncao)

本来インド海岸固有の用語であったが、今日ではポルトガルでも普通に用いられ、これは、一定の時期に一定の方向へ向かい他へは航海しない風一般と理解されている。たとえば、ゴアからコモリン岬までは9月に入ってから、マラッカからゴアへは2月10日から4月末まで、日本からインドへは10月、そして日本から中国へは3月、コーチンから日本へは4月末、ホルムズ（海峡）からゴアへは4月15日あるいは12月25日に、など。（以下略）

ヤバウン (Iapam)

アジアの諸島。Gipou と呼ばれるが、これは中国人が付けた名前であり、それを（ジョアン・ルセナ神父の見解では）ポルトガル人が聞き、最初に覚えたのである。この注目すべき列島は、中国の東方、31度と40度の緯度と171度と188度の経度の間に位置する。すべての島のなかで、主要な、他の多くの島々が付随しているものは、3つである。すなわち、Niphon（本州）ここには、古くは53の王国あるいは公国が存在したと言われている。Xicocô（四国）、ある人々は Tonca あるいは Tenca（天下？）と呼ぶ。そして Ximo（九州）はさらに南に位置し、Gotto（五島）、Duco, Firando（平戸）、Meaxuma（女島？）、Seuxima, Nangaixumâ, Amacuça（天草）、Conzurâ などに囲まれている。これら（3つの）島を合わせると極めて広大な周囲になる。なぜなら、英国人ウィリアム・アダムス（三浦按針 1564-1620）の報告によると、彼は多年に渡りそれらを踏破したのであるが、Niphon の島の周囲はおよそ600レグアに過ぎない。現代のある人々は、Japaõ（日本）を7つの部分に分割している。それらの内、Niphon の島は、5つ（地域を）含んでいる。すなわち、Jamaisoit（山城？）、Jetsengo（越後？）、Jetsengen（越前？）、Quanto（関東）そして Ochio（奥州）である。古くは Meaco（都）が首都であったが、今日では Jedo（江戸）である。ポルトガル人が Japaõ（日本）を発見したヨーロッパの最初の航海者であった。そこへは暴風が彼らを向かわせたのである。1542年のことであった。彼らの最初の停泊地は Sarunga（＜ザネガシマ：種子島＞）という海からあまり遠くない町であった。この後、彼らは Kisma と呼ばれる無人の島に入植した。ポルトガル人が日本に最初に到着してから7年後、すなわち1549年に、聖フランシスコ・ザビエルはそこへ入国し、福音を次のごとき幸いなる成功とともに宣教したのである。（イエズス）会と他の修道会？（de outras Religioens）の宣教師たちの助けによって、1629年には、日本において四十万人以上のキリスト教徒が数えられていた。しかし、現地の王族たちのねたみ、改宗者の数の多さへの嫉妬によって、またあるいは、ポルトガル人の利益をうらやんだヨーロッパの商人たちの悪意に満ちた背信や中傷によって、またあるいは、さらに様々な地獄の策略、悪魔的な仕掛けにより、殉教者の数と拷問具の野蛮な発明においては、ローマ皇帝たちの迫害をもしのぐほどの、残忍な迫害が始まったのである。そして短期間のうちに、いくら嘆いても嘆ききれない災難とともに、かの新生の繁栄を誇ったキリスト教信仰全体が消滅し

たのである。 *Japonia, ae, Fem.*

日本人 *Japo, onis. Masc.* または *Japonius, ij, Masc.*

日本のこと *Japonicus, a, um.*

* トルデシリヤス条約の 0 度は、正確には 46 度 37 分。境界線：Linha Imaginária

* 五畿七道：山城・大和・摂津・河内・和泉；東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道。

* 一説に 1543 年。なお、ブリュトーには、鉄砲についての記述が見られない。

* 1612（慶長 17 年）直轄領にキリシタン禁制。1628 年ころ「踏み絵」が始まる。

1620 年代には、組織的な宣教活動は困難になっていたと思われる。

IAPONEZ.

Iaponéz 日本のこと。Japão の項を見よ。Japoneza の言葉（日本語？）ルセナ『ザビエル伝』482. col.2

* 地名形容詞の男性単数形は、男性名詞として言語名として用いられる：

ポルトガル語：o japonês；スペイン語：el japonés

NIPHON

Japão（日本）で最大の島。 私たちの大陸の東の地方に位置する。昔は、Meaco（都）がこの島の首都であったが、今日では Jedo（江戸）である。およそ 60 レグアの周囲である。この小さな領域に、かつては 53 の王国が数えられた。Niphon は現地の言葉で**光の源**（*Fonte da Luz*）という意味である。

India Portuguesa

（ポルトガル領インド：オランダに敗北後、昔日の繁栄を回顧した記述）

・・・日本からは銀を積んだ裕福な船団が行きかっていた。中国からは金を運んで来ていた。・・・中国の磁器；日本の漆器・・・（以下略）

* 石見銀山・生野銀山・相川鉱山など。16 - 17 世紀各地で発見・開発。

Porcelana (磁器)

……。Porcelana は中国あるいは日本の磁器 (louça fina) のことである。日本で最高の磁器は Fisen (肥前) の町で作られ、中国で最高の磁器は江西省景德鎮で作られる。(以下略)

* 李参平 (1655 年没)

文献および解題

原典

Raphael Bluteau, Vocabulário Portuguez e Latino. 8 vols., Coimbra, 1712. 2 suplementos, Lisboa, 1727-1728? の復刻版を使用: Rep. Georg Olms Verlag AG, Hildesheim 2002, ISBN 3-487-11616-2,3. 518-542 ページ欠。他に、リオデジャネイロ州立大学が Brasil 500 anos (ブラジル 500 年) の記念事業で作成した電子版がある。

ラファエル・ブリュトーの経歴について

以下のフランスで刊行された人名事典 3 点と、リスボンとサンパウロで共同刊行された哲学辞典の記述を参照した。

Raphael Bluteau: Biographie Universelle (Michaud) ancienne et moderne, Paris, 1854, t.4, 474; Nouvelle Bibliographie Universelle, Paris, 1880, t.6, 278; Dictionnaire de Biographie Française, Paris, 1954, t.6, 732; LOGOS Enciclopédia Luso-Brasileira de Filosofia, Lisboa / São Paulo, 1989, t.1, 697-699.

なお、ブリュトーが所属したテアティノ修道会については、研究社『新カトリック大事典』「テアティニ修道会」の項: vol. 3, p.1109、New Catholic Encyclopedia, Washington D.C., 1967, Vol. XIV, p.5-p.6: “Thatines” がある。筆者が知る限り次のスペイン語百科事典の記述が最も詳しく、後に教皇パウロ 4 世となる初代総長カラファ (Carafa, Gian Pietro, 1476-1559) ら会に所属した重要人物が小項目別に解説されているが、ブリュトーについての項目は見られない。Enciclopedia universal ilustrada europeo-americana, Madrid (Espasa-Calpe), 1907-, vol. 59 (1928), p.1146-p.1158: “Teatino, na”.

主要参考文献

Vocabulário da Lingoa de Iapam com a declaração em português, 1603, 1604 : 『長崎版日葡辞書』(Oxford 大学 Bodleian Library 所蔵本ファクシミリ) 亀井孝解説、勉誠社、1973 年。

土井・森田・長南編訳 『邦訳日葡辞書』岩波書店、1980 年 ; 『索引』、1989 年。

H.チースリク・太田淑子 『日本史小百科キリシタン』東京堂出版、1999 年。

『新カトリック大事典』研究社、2009 年。

田中建夫・石井正敏[編] 『対外関係史辞典』吉川弘文館、2009 年。